

カワウのモニタリングと被害防除対策

【研究のポイント】

カワウは、魚を餌にしている鳥で、日本では本州以南で繁殖しています。高い潜水能力と移動能力を持ち、たくさんの魚を食べることで知られています。一方、河川においては、漁協が組合員や遊漁者のために、アユなどを放流しており、せっかく放流したこれらの魚がカワウに食べられる被害を受けています。内水面チームでは、県内のカワウの生息数とカワウに食べられる魚の量を推定するために、定期的にモニタリング調査を行い、現状把握と被害量の推定を行いました。またカワウの増加や捕食を防ぐため、銃器を使用しない方法で個体数管理の可能性を検討しました。

【研究の成果】

1)モニタリング調査
 ・県内のカワウの生息数は、10年前と比べ、ねぐらの数で2倍、産卵場所であるコロニー数で5倍、生息数で4倍程増加しました。また、隣県の福岡県、熊本県および宮崎県との間で、カワウの移動が確認されました。
 ・2011年からの3カ年の平均的な生息数は、春・夏期のアユが川にいる期間は300～500羽前後でしたが、秋・冬には県外から飛来する「わたりカワウ」が加わり、多い月では2,000羽以上となりました。
 ・図に示すとおり、県内には少なくとも9カ所のねぐらやコロニーなどの生息ゾーンがあることが確認されました。
 ・「わたりカワウ」は桜づつみ(宇佐市)、夫婦池(杵築市)、大野川鉄塔(大分市)および三栗島(佐伯市)で確認され、いずれも沿岸部が分布の中心でした。

2)カワウの胃内容物調査
 ・カワウはいろんな魚を食べますが、漁業上重要なアユの捕食割合が高かったのは、稚アユの放流時期や産卵時期で、稚アユは放流後10日間で特にカワウに捕食されやすいことがわかりました。
 ・わたりカワウは、晩秋には産卵のために集まったアユや、早春は海から遡上してくる稚アユを捕食していると考えられました。

3)銃器以外による個体数管理手法の検討
 ・ねぐらに営巣された巣の多くにビニールひもを掛けると、そのねぐら・コロニーはいずれも消滅しました。
 ・産卵された巣にドライアイスを投げ込み、ヒナの孵化を抑制することで、ヒナが巣立つ数を減らすことができました。
 ・棒などで幼鳥や卵を落下させて捕獲する方法も有効であり、幼鳥が現れる繁殖後期が適していることもわかりました。
 (注:ここにあげている手法は、地元自治体の許可が必要な場合があります。)

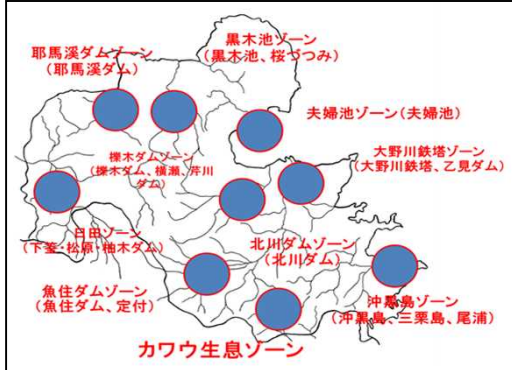


表 2013年黒木池コロニーで行ったドライアイス散布によるカワウ卵発生抑制試験

これまでの知見
 営巣数に対する平均巣立ち数 1.55 羽/巣
 2013年に黒木池コロニーで
 営巣数 137 巣に産卵した卵 332 個中
 200 個に対してドライアイス処理を行った
 巣立ちしたカワウ数 69 羽
 営巣数に対する巣立ち数 69 羽 / 137 巣
 = 0.50 羽/巣

ドライアイス散布により1営巣当たり1羽の巣立ち抑制に成功した

【生産者の声】



日田漁業協同組合
手島勝馬組合長

筑後川水系の上流に位置する日田漁協では下流域に夜明ダムがあり、アユの天然遡上が全く無いので、アユを毎年100万尾程度放流しています。そのアユをカワウ・シラサギ・アオサギなどの鳥によって、毎年大変大きな被害にあっています。内水面チームのカワウ対策の指導を受け、組合員の散弾銃による駆除及び、テグス張り、剥製の吊り下げ、花火等を使った防除に大きな労力を使って水産資源の保護に努めています。今後は広域的な一斉駆除及び他地域で行われている竹柵やはえ縄等による駆除を行うことにより、日田のアユを守っていきたくと考えております。

【連絡先】

担当：農林水産研究指導センター 水産研究部 浅海・内水面グループ 内水面チーム
 TEL：0978-44-0329
 住所：大分県宇佐市安心院町荘42